
サライヨ

遠藤芭土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サライヨ

【Nコード】

N2294G

【作者名】

遠藤芭土

【あらすじ】

溺れそうな私に話しかけたのは、ハトさんだった。私はハトさんに、空を飛びたいとお願いした。

深い悲しみの涙、その涙のたまった湖に溺れそうな私。

誰かが私に手を差し伸べる。それは誰？

いや、人じゃない。それは言葉を話す人じゃない。

ハト、それはハト。そんなハトさん、私にこう言うの。

「やあ、お嬢さん。君は涙を流し俯いている、だからたまった涙で溺れるんだよ」

そんなのハトさんに言われたくない、空を飛べるのに地を這うハトさんには。

「ハトさんあなたはいいですよ、空が飛べるから。だけれど、今日も下を向くとあなた達が私の足元でパンクズを突付いてた。そんなあなたが言える立場なの？」

ハトさんは胸を膨らませ、白くて小さな羽根を広げて言いました。
「ボクは悪魔なんだ。お嬢さんたちがボクを見下したところで、ボクの思う壺なのさ」

平和の象徴とさえ言われたハトさんが、空を見上げて言います。

「お嬢さんが下を向いている間、ボクは魂を突付いている。お嬢さんが後ろを振り返ってる間、ボクは大空を羽ばたいているんだよ。」

ハトさんはとてもイジワルだ。

「それならハトさん、私も空を飛んでみたい」

「悪魔のボクにお願いするの？ 見下るせばパンクズを突付くボクにお願いするの？」

「はい、私は溺れて死にたくない」

「それならおいでお嬢さん」

ハトさんは私を涙の湖から助けてくれた、そして空へと連れてって
た

そこは想像と違う世界、とても苦しくて寒くて痛い世界。

「息ができないよハトさん」

ハトさん呼んでも返事が無いの。

そしたら違う声で返事が聞こえた。

「汝、空気を欲するか」

「……空気が欲しい」

周りの空気が変わった、とてもやわらかい空気に。

私に返事をくれたのは、カラスだった。

「カラスが私に空気をくれたの？」

黒く大きな翼を羽ばたかせカラスは言います。

「我は、天使。汝の願いを叶えよう」

カラスが天使？

「カラスが天使なんて聞いたこと無い、人に迷惑かけるし」

「汝は、天使を見た事があるのか。汝は人に迷惑をかけたことがないのか」

天使は見た事はない、人に迷惑もかけた。

「それならカラス、私の願いを叶えてみてよ」

「汝、願いを言え」

「とりあえず寒いから、暖かい服装とストーブを頂戴」

私は暖かい服装とストーブを手に入れた。ストーブの電源はどこから来ているのだろうか。

「これが空なのね、思っていたのとだいぶ違う。それに飛ぶと言うより落ちているだけ」

今更ながら、私がおのすごく高い場所にいるという事に気づいた。遠くに小さく見える街からして、かなりの高度に私はいる。

「汝は翼を持っていないから。いや、翼を捨てたからと言うべきか私に翼なんて元から無い。」

「それならカラス、私に翼を頂戴」

「それは出来ない、一度捨てたものは与えられない」
ケチな天使だ。所詮はカラスか。

「後どれくらいで地上に着くの？」

「それは教えられない、一度捨てたものは教えられない」

やはり天使とは嘘か。こんな事なら自称悪魔のハトさんの方がいい。

そうだ、ハトさんはどこへ。

「カラス、ハトさんはどこへ行つた？」

「悪魔は仕事を終えて、地に降りた」

まあ、どうせ夢さ。これは夢さ、いつか覚める夢さ。

「それならカラス、眠いので布団をよこせ」

「汝が望むなら」

ふかふかの布団と大きな枕が私の元に現れた。

「お腹も空いた、ハンバーガーをよこせ」

「汝が望むなら」

夢とはいえ、とても心地のよい夢だ。これならしばらく覚めなくてもいい。

「次は喉が渴いた、紅茶が飲みたい」

「汝が望むなら……」

それから私はいろいろな物を要求し続けた。

カラスは見事に私の要求通りの物をくれる、少しは見直した。

そんな夢も気付けばかなりの時間がたったのであるう、どうやら地面が近くなってきた。

「カラス、地面が近くなっているがどういう事だ」

「空を落ちていたのだ、いつかは地面に辿り着く」

夢とは言え、それは気分がよくない。

「それでは、次はパラシュートを出してもらおうか」

「そんな物は存在しない」

いままで何でも出したカラスが、パラシュートを知らないとはなんたること。

所詮はカラス、やはり黒い悪魔か。

「それでは落ちて死んでしまっではないか」
「いかにも」

とんだ天使がいたものだ。人が落ちるのになんの救いの手も差し伸べない。夢とはいえがっかりだ。

「願いを叶えると言ったのは嘘か？」

「一度捨てた物と存在しない物は与えられない」

「それなら、こうだ。カラス、私を助ける」

「それは出来ない、一度捨てたものは与えられない」

なんと使えないカラスだ。こんなカラスとはもう話したくも無い。

「使えぬカラスだ、私の前から消えなさい」

「汝の願いを叶えよう」

そう言っただけカラスは飛び去った。

夢とはいえ地面に落ちるのは怖いから、私は眠る。カラスがくれた布団で眠る。

睡魔はすぐにやってくる、目をつぶればすぐにやってくる。

夢の中の夢。それは存在した。

暗闇の

中でちらつく

灯籠

影絵回れば

生きる喜び

「カラス！ 親に会いたい！」

さきほど自分で消えろと言ったカラスを呼んでいた。

我俣だと分かっている、しかしカラスよ私の願いを叶えてくれ。

「それは出来ない、一度捨てたものは叶えられない」

「カラス！ 痛みが欲しい！」

「それは出来ない、一度捨てた物は与えられない」

「カラス！」

今更遅いよね……

なんてバカだったんだろ私って。

「生きたい！」

カラスが最後に優しさを見せたのかもしれない。

カラスは私に教えたかったのかもしれない。

カラスは本当に天使だったのかもしれない。

カラスが最後に見せてくれたのは、一面に広がる青空だった。

(後書き)

意味不明すぎたらごめんなさい。
でも、分かってくれる人いたら嬉しいかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2294g/>

サライヨ

2010年10月8日15時11分発行